

櫛形町文化財調査報告書 No. 4

歴 遺 跡
— SHI ME GI —

1986. 3

櫛形町教育委員会

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

本遺跡は、櫛形町の南西部に位置する下市之瀬字ノ木に所在する。

櫛形町では、昭和57年から昭和61年までの5ヶ年計画で、農村地域工業導入事業が実施されることになった。この事業は、農業構造の改善と併せ農業所得の向上に努めるとともに、工業を計画的に導入して本町内に就労の場をつくり、農家子弟や、若年労働力の町内への定着を促進し、農家と地域の活力を保持させるべく総合的な地域経済及び、文化の向上を図り調和のとれた発展を目指すものである。

この事業に伴ない櫛形町教育委員会では文化財保護法に基づく埋蔵文化財の確認調査を実施することになり、昭和60年11月15日～昭和61年1月31までの調査日程を組み、発掘調査に着手した。調査の過程で多くの遺構が検出され、多数の遺物が出土し、住居址、溝等を有する集落遺跡を確認することができ無事、調査を完了した。この調査にあたり県文化課の末木健氏のご指導及び地元の皆様の絶大なご協力のあった事を記して謝意を表わす次第である。（鶴田）

調査主体：櫛形町教育委員会

調査担当者：清水 博

事務局：鶴田一雄（町社会教育係長）、小林徳男

調査参加者：小林宇佐、小口妙子、出口真由美、白居直之、野中新市、河西俊雄、川崎義造、河野 一、塩釜武雄、市橋芳雄、深沢政美、河野寅重、中沢 栄、深沢道子、齊藤みや子、上田みな子、河野節子、野中つる江、古屋なみ、桜田みさえ、清水 静、伊藤よ志恵、青木みどり、桜田きく江、桜田和子、杉山昌江、杉山敏子、中込かやの、河野清美、桜田定子、秋山昌寛、小笠原 淳、樋川重行、川名富美子、刃刀兼子

調査指導：山梨県教育委員会文化課 末木 健、新津 健

山梨県埋蔵文化財センター 田代 孝、坂本美夫、保坂康夫

第Ⅱ章 遺跡の概観

ノ木遺跡は、中巨摩郡櫛形町下市之瀬字ノ木に所在する。櫛形町はその西半を櫛形山麓及びその前面に発達した市之瀬台地が占め、東半は盆地床縁辺に形成された扇状地形となる。市之瀬台地前面は断層崖によって盆地と画され、前端には円頂丘が並ぶ。台地上面には漆沢川、漆川、市之瀬川などの諸河川が流れる。これらの河川は盆地床に至ると流勢を弱め、谷の出口に扇状地を形成するが、有名な御勘使川の形成する扇状地と相まって広大な「複合扇状地」形をなす。扇尖部にあたる桃園、小笠原、下市之瀬では水利に乏しく、豪雨時には洪水に襲われる地形となる。地下に滲みこんだ水は扇端部で再び湧き出して弧状の湧水列をなしている。

ノ木遺跡は、先述した複合扇状地の西南部に位置し西方に上野山丘陵を見上げる地点である。

ノ木 遺 跡

また、市之瀬川と漆川の合流点にもあたり、東に漆川、南に市之瀬川に挟まる。特に南部は両川の河床とほぼ同レベルとなっていることもあり、両河川の改修工事が完成するまでは、幾たびも水害に見舞われた土地である。

町内西半を占める市之瀬台地上は、縄文時代から弥生時代末の良好な遺跡が知られ、六科丘遺跡、上の山遺跡、上ノ東遺跡などが発掘調査を受けている。またノ木遺跡を見降ろす台地先端には縄文時代早期の土器が採集された星喰場遺跡が存在する。弥生時代末から古墳時代初頭に至ると主要な遺跡は台地上の湧水列上に占地する傾向をみせ、甲西町の住吉遺跡、清水遺跡などが発掘調査をなされている。上野山丘陵上には物見塚古墳、六科丘古墳、上ノ東古墳などの前期古墳が存在している。次いで古墳後期になると扇状地上に群集墳が形成される。ノ木遺

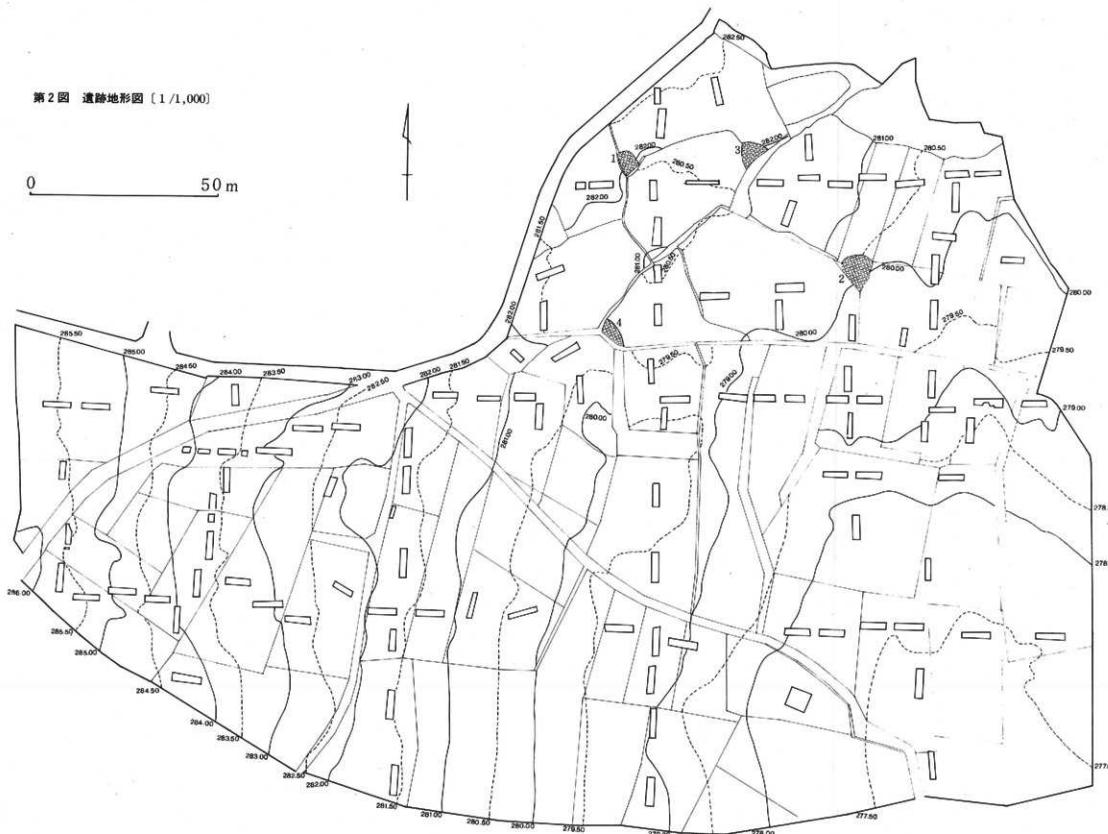


第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1/25,000]

- 1 …ノ木遺跡 2 …曾根遺跡 3 …伝廟院遺跡 4 …東原遺跡 5 …六科丘遺跡 6 …六科丘古墳
- 7 …(伝)小笠原館址 8 …上の山遺跡 9 …上ノ東遺跡 10 …上ノ東古墳 11 …物見塚古墳 12 …鉢物師星古墳 13 …江原久保沢遺跡 14 …星喰場遺跡 15 …上村古墳 16 …御前山遺跡 17 …住吉遺跡 18 …清水遺跡

第2図 遺跡地形図 [1/1,000]

0 50 m



跡の上方、扇尖部から扇頂部にかけては住村古墳、鉄物師塚古墳、塚原上村古墳、などが築造されている。更に遺跡附近は「塚原」という字名が示す通り、かつては多くの群集墳の存在が伝えられているところである。

以上、管見した様に柳形町周辺には多くの遺跡が知られているが、扇状地の扇尖部附近は後期群集墳を除くと、従来遺跡の存在がさほど知られていなかったところであった。（清水）

第三章 調査の方法

今回の調査は工業団地造成予定地、約40,000m²内に試掘調査を実施し、遺構の所在・内容、遺跡の範囲・レベル等を確認し、その結果によって計画されている開発事業に対して埋蔵文化財の保護対策方の資料を得る事を目的とした。

地域内全域に10m方眼のグリッドを組み、南北方向に北からA・B～V、東西方向に西から1・2～30と番号を付した。基本的には6グリッドおき、すなわち60m間隔に南北、東西に貫通する様に、相当するグリッド内に試掘坑を設けた。しかし、ぶどう棚、道路、農水路等の諸施設、果木、桑等の為、試掘坑を割愛し、或いは移動せざるを得ない部分が多くあった。また、確認調査に先立つ表面採集時に遺物散布が認められた、J・K-23～26区、J・K-15・16区、E-21・22区、K・L-7・8区附近では試掘坑を直交させる事により試掘比率を高める様に留意した。更に遺構・遺物の存在する可能性が薄いと考えられた造成地東端部及び南半部は試掘坑の設定を控えめとし、部分的に3～8%程の濃淡をもたらした。

試掘坑は総数120本(1,920m²)を予定し、造成予定地40,000m²に対して、面積比5%にあたるが、前述した様な事情により最終的な試掘坑数は111本に止まった。（清水）

第四章 調査の経過

発掘調査は、昭和60年11月14日より開始した。ほぼ三角形状を呈している造成予定地の西南端、2-K区から着手し、順次東へ向って実施した。作業は全て人力で行った。

調査前の予想通り、耕作土の下位は礫層、砂礫層が瓦層をなして厚く堆積している。特に、造成予定地西南部では著しく、100～140cmに達しており礫層下位はローム質の砂質土層となっている。礫層が厚く、遺構面が不明確であった事などから、作業は著しく難行した。

調査地域が東へ進むに従い、礫層は20～30cm程と薄くなったり、礫層下位は完全な砂層となり、東端部では150cm以上の厚さで堆積する事が確認された。以上の様に造成予定地南半部では耕作土下位に礫・砂層が厚く堆積し市之瀬川の氾濫や、流路変更の激しさを物語っていた。また出土遺物も極めて少なく、遺構も10-M区などから数ヶ所検出しえたのみである。

中央部から北半部にかけては、南半部に比し礫層も薄くその分布も希薄となる。全体的に砂・礫が混入するといえ、茶褐色土層・黒褐色土層が主として認められ、その下層はローム質土層となり部分的に礫層・砂層となる。この地区からは多くの遺構、遺物が検出された。25-

K区から、奈良・平安時代の住居址が検出され周囲からピット、溝等が認められた。やや北へ離れた21-I区からも竪穴状遺構が検出された。これらの遺構を図る様に20-H、21-K、25-N、24-O区では黒色含礫土層の厚い堆積が観察され、極めて良好な遺物包含層でもあった。

西へ進んで13-K、16-J区からは縄文時代中期の遺物を伴う落ち込みが発見された。縄文時代の遺物はこれらの2区を南限として造成予定地の西辺に沿う様に分布している。

次いで19-27-E区では、7ヶ所程の住居址様落ち込みを確認した。これらは全て礫混りの暗茶褐色土層中に掘り込まれ、覆土にも大量の礫が混入していた。また遺構確認面が予想に比し浅かったが、これは河川の氾濫等による土砂の流失である可能性が強い。この地区の調査は12月中旬から同下旬にかけて、試掘坑面の凍結等に悩まされた。

ところで造成予定地内には9ヶ所の積石塚様の石積が認められていた。周辺には後期群集墳が残存している事もあり興味がもたらされた。9ヶ所中4ヶ所の石積に1m幅の試掘坑を設定し石積状況等を観察したが期待した結果は得られなかった。

12月下旬北半部の調査を完了し、1月には最後に残った数本の試掘坑の調査と、図面作成を行ない、埋め戻しに入った。埋め戻しは1月22日に完了し、同日現場を撤収した。(小林・清水)

第V章 検出した遺構と出土した遺物

a) 検出した遺構 (第3・4図)

検出した遺構は、住居址様落ち込み10ヶ所、土塹状落ち込み9ヶ所、溝状落ち込み3本などである。試掘坑が狹少なこともあります、また遺構の掘り下げを行なわなかった為、その拡がり、性格、時期等は確定しがたい。以下にその概要を記しておく。

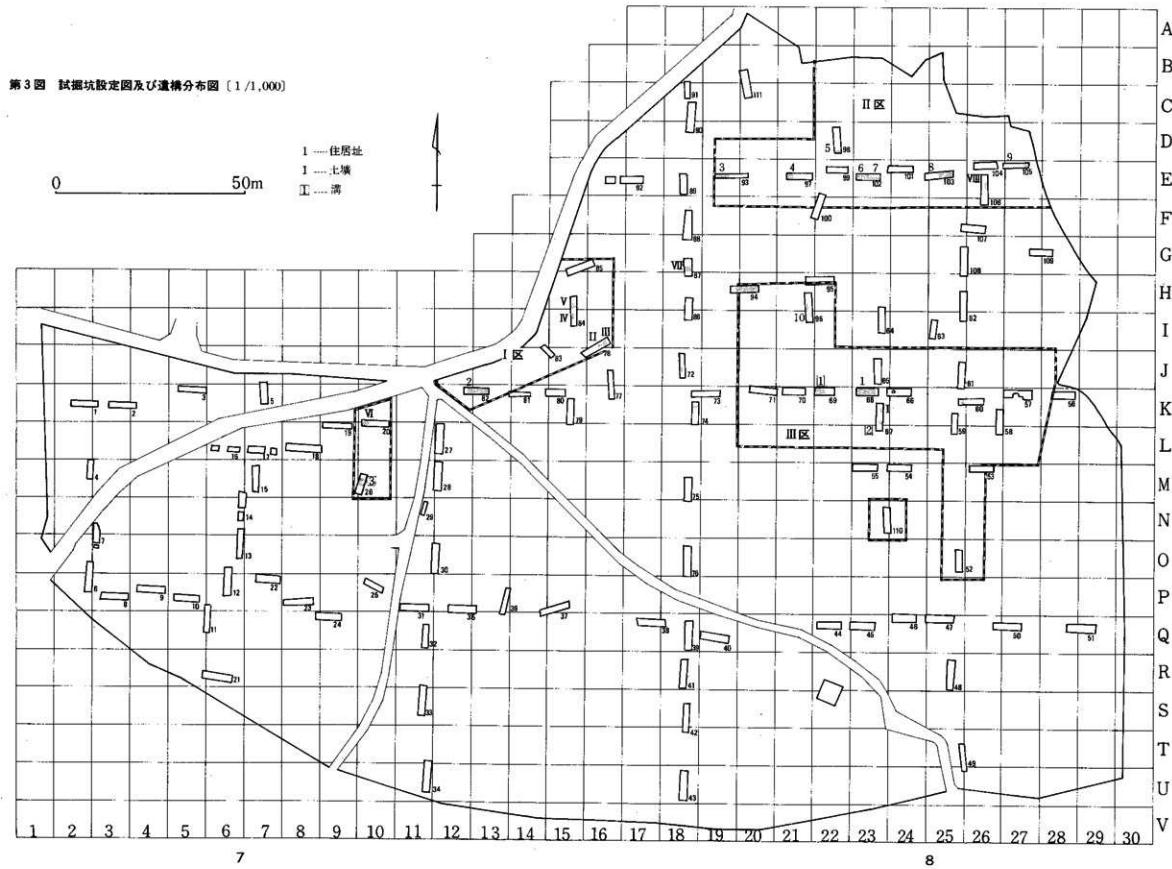
住居址様落ち込み 落ち込みは10ヶ所認められた。2号落ち込みが縄文期、他は奈良・平安期である。後者も1・10号落ち込みと、3~9号落ち込みでは時期差を有する可能性が認められる。検出面は10号落ち込み以外は比較的浅く含礫層中に掘り込まれている。覆土にも礫が大量に流入しているが特に5~8号落ち込みは人頭大の礫が主体となる。落ち込みの規模・形状は不明であるが、1・6~8号落ち込みは直線的な平面形を呈する。また1・5~7号落ち込みは焼土を伴う。

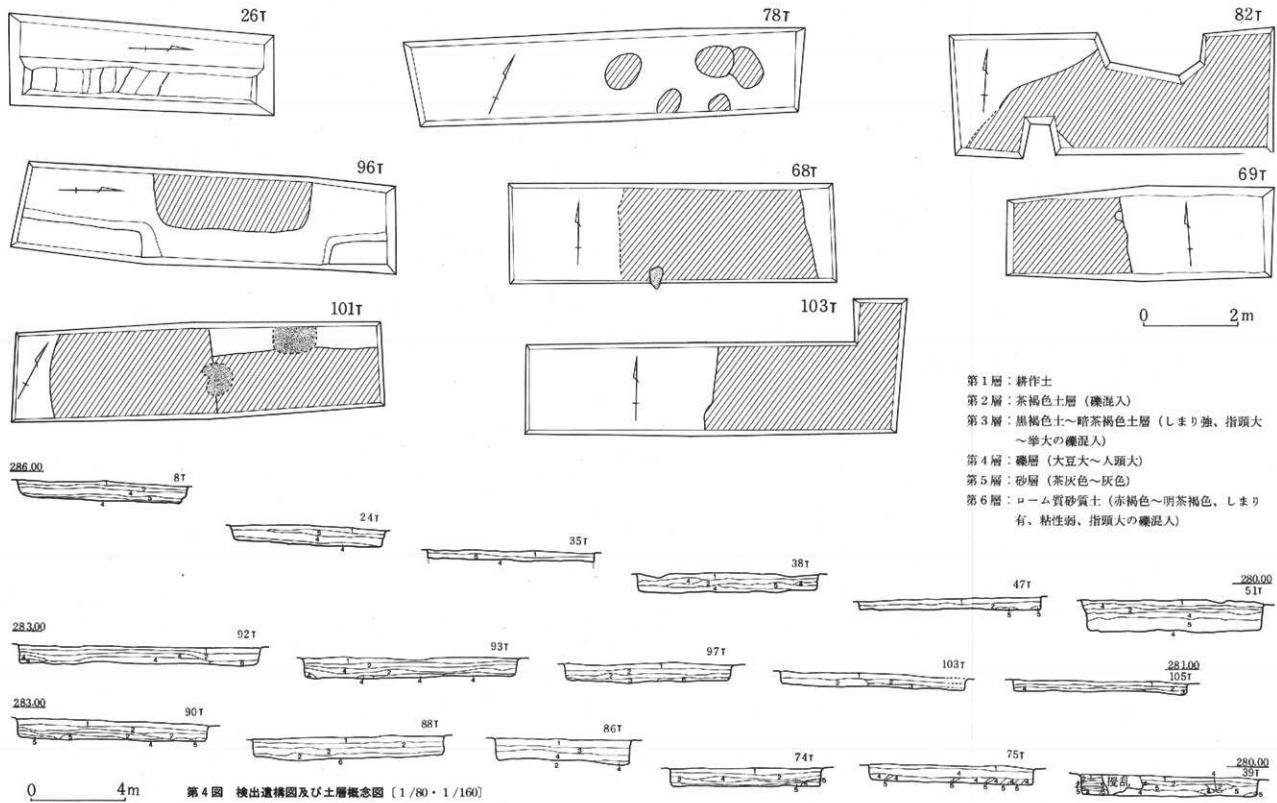
土塹 8ヶ所確認され、全て円形を基調とする。2~5号土塹では大量の縄文式土器が出土している。また、66号試掘坑からは焼石・炭化物を伴う土塹が検出された。

溝 3本の溝が検出された。1号溝は黒褐色含礫粘質土を覆土とし、69号試掘坑で東側立ち上がりが確認された。西側立ち上がりは不明確で、規模は確認しえなかった。しかし94、70、110、52号試掘坑にも同質の土が厚く堆積しており、遺構の集中する23~25-J~K区をL字形に囲繞する可能性もある。70、110、52号試掘坑からは大量の土器片(奈良・平安期)が出土している。2号溝は26号試掘坑で、そのごく一部が確認された。覆土は疊層・含礫層が互層をなし、巾2m、深さは1.8mを測る。遺物は出土していない。

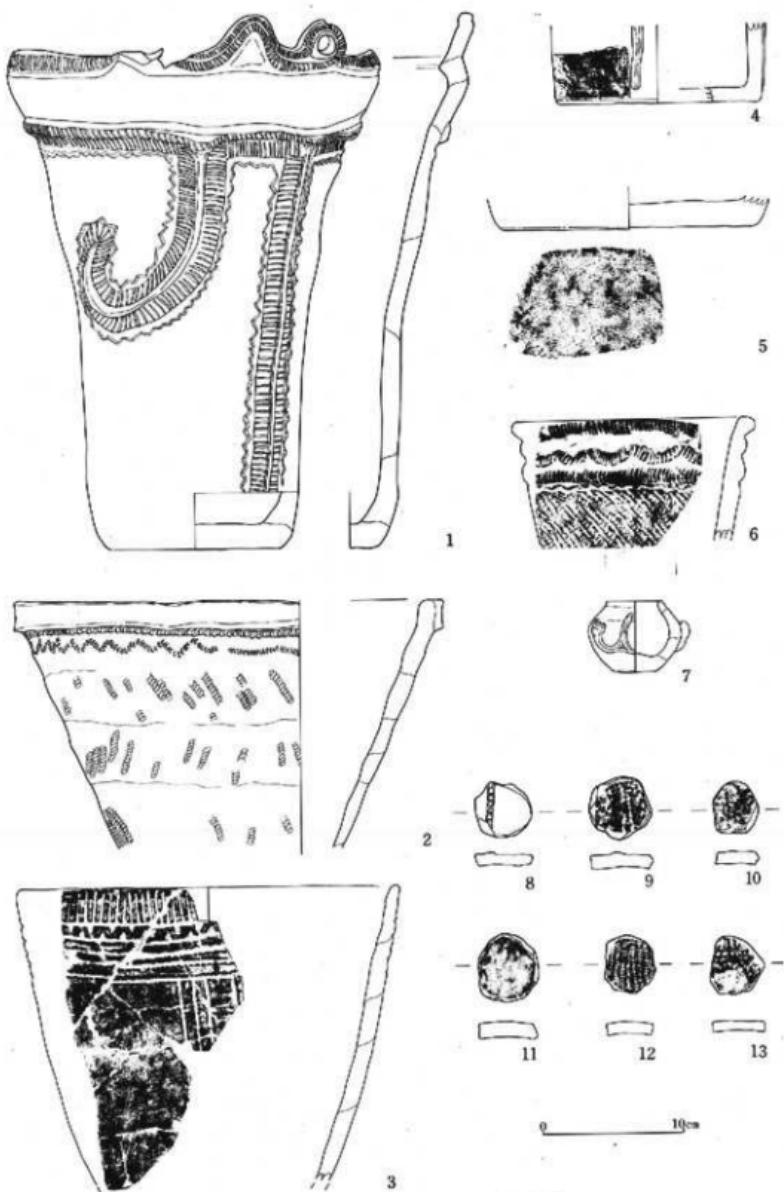
(清水)

第3図 試掘坑設定図及び遺構分布図 [1/1,000]





第4図 掘出構造図及び土層概念図 [1/80・1/160]



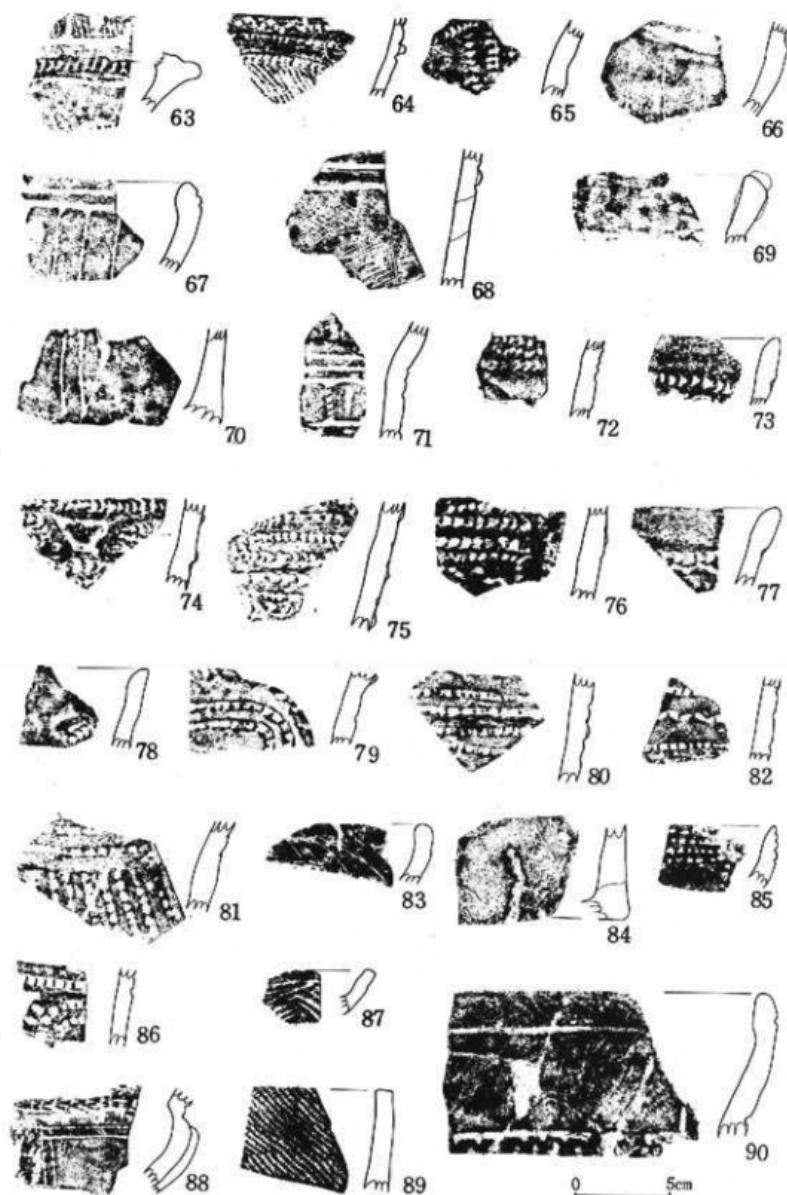
第5図 出土土器・縄文時代I〔1/4〕



第6図 出土土器・縄文時代Ⅱ [1/3]



第7図 出土土器・縄文時代III [1/3]



第8図 出土土器・縄文時代IV (1/3)

b) 出土した遺物

縄文式土器 (第5~8図)

1は半截竹管押引きを隆帯周辺にめぐらし、隆帯には同様の工具で爪形文を施文する。口縁部には蛇を模したと思われる1対の把手が施される。口縁部はやや内湾する。外面は指ナデであるが内面は非常によく磨かれる。底径12cm、口径25.4cm。2は口縁下に押引きの沈線文と、粗雑な半截竹管による押引き文が施文される。胴部は各輪積み単位ごとにLRの単節縄文が粗雑に施文される。内面はヨコヘラ磨き、外面は指ナデ。口径30.4cm。1、2共に82トレンチ出土で、藤内期に比定されよう。3は口径27.6cm。交瓦刺突文及び棒状工具による沈線文が施される。102トレンチより出土、勝坂式期併行。4は底径14cm、現在高5.5cm。底部破片で、内面には厚さ1.5mmに達する炭化物が付着する。5は底径17.8cm、現在高2.3cm。共に77トレンチ出土で藤内期に比定されよう。6は隆帯部に半截竹管による押引き文が施され、下部にはRL単節縄文が施文される。口径17.4cm。81トレンチ出土で藤内期に比定される。7は手すくねの小型壺型土器。三文文を有し、隆帯周辺に塗朱される。83トレンチ出土で新道期に比定される。8~13は土製円盤。いずれも再利用のもので擦痕は観察されない。8は83トレンチ、9は90トレンチ、10は78トレンチ、11~13は82トレンチ出土である。

77トレンチ 14は三角押文が多用される口縁部破片。15は半截竹管による押引き文と、三文文を有する深鉢型土器胴部破片。16はチャタビラ文を有する胴部破片。17は無文の胴部破片。18は隆帯に爪形文を有し、ヘラガキ沈線と隆帯による横帯区画文を有する。19はよく磨かれた口縁部破片で、有孔鋲付土器の可能性が強い。14、15は新道期、16~19は藤内期に比定される。

78トレンチ 20は隆帯に半截竹管による押引きを施した口縁部破片。21は隆帯に押引きの半截竹管文を有する胴部破片。22は縦の区画文を有する胴部破片。23は半截竹管による押引き文と、三角区画文を有する口縁部破片。24は隆帯に半截竹管による爪形文を施した口縁部破片で、口唇部に蛇把手を有する。25は隆帯に爪形文を有し、LR単節縄文に施した胴部破片。26は半截竹管による押引き文を有する胴部片。27は口縁部を無文帶、頸部に平行沈線文を有する口縁部破片。28はLR単節縄文を施された胴部破片。29はLR単節縄文を有し“8の字文”を有する口縁部破片。20~26は藤内期、27、28は曾利II・III式期、29は拙の内式期に比定される。

81トレンチ 30は三角押文を多用した胴上半部破片。31は隆帯間に三角押文を施した深鉢胴部破片。32、33は隆帯に半截竹管を施した抽象文を有する深鉢胴部破片。34は隆帯文を有する胴部破片。35は良好な磨きの上に条線文を施した胴部破片。30、31は新道期、32~34、36は藤内期、35は曾利IV式期に比定される可能性が強い。

82トレンチ 37は三角押文とチャタビラ文を施文された深鉢胴部片。38は三角押文を多用した胴部破片で、下部は指頭ナデで整形される。39は隆帯に爪形文を持ち、ヘラガキ沈線で縦帯区画文を構成する。40は口唇部にLR単節縄文を施される浅鉢型土器。41は棒状工具による沈線文が施文される深鉢口縁破片。42~44は半截竹管による押引き沈線文が施される深鉢口縁片。

45は隆帯にヘラガキ沈線を有する口縁部破片。46は垂下する隆帯に半截竹管押引き文と二角押引文を用いる深鉢胴部破片。47は刺突文と抽象文を有する胴部片。48は爪形文にL R 単節縄文が施文され、焼成前穿孔が行われる。49、50はL R 単節縄文が施文される。37、38は、新道期、30～50は藤内期に比定されよう。

83 トレンチ 51は隆帯にヘラガキの綾杉状沈線文が、隆帯上部にはヘラガキ沈線文が施文される。52は縦帶区画文を有する胴部破片。53はL R 単節縄文が施文され、所謂わらび手文が垂下する。51、52は藤内期、53は曾利期に比定されよう。

84 トレンチ 54は三角押文を多用し玉を持つ。55は三角押文と棒状工具による押引き沈線文を併用する胴部破片。56は半截竹管による押引きを施す深鉢胴部破片。57は深鉢口縁破片で隆帯に半截竹管による押引き文が施される。58は三角押引き文の施される浅鉢口縁部破片。59は底径 7.6cmを測る底部破片。胴部最下端までL R 単節縄文が施される。60は半截竹管による沈線文及び三叉文が施文される深鉢型土器。54、55、58、60は新道期、56、57、59は藤内期。

86 トレンチ 61は半截竹管押引き沈線文と隆帯には爪形文が施文される。時期は藤内期。

88 トレンチ 62は半截竹管による押引き文と角押文が施文される。時期は新道期。

89 トレンチ 63は棒状工具による三叉文を有する浅鉢口縁破片。時期は新道期であろう。

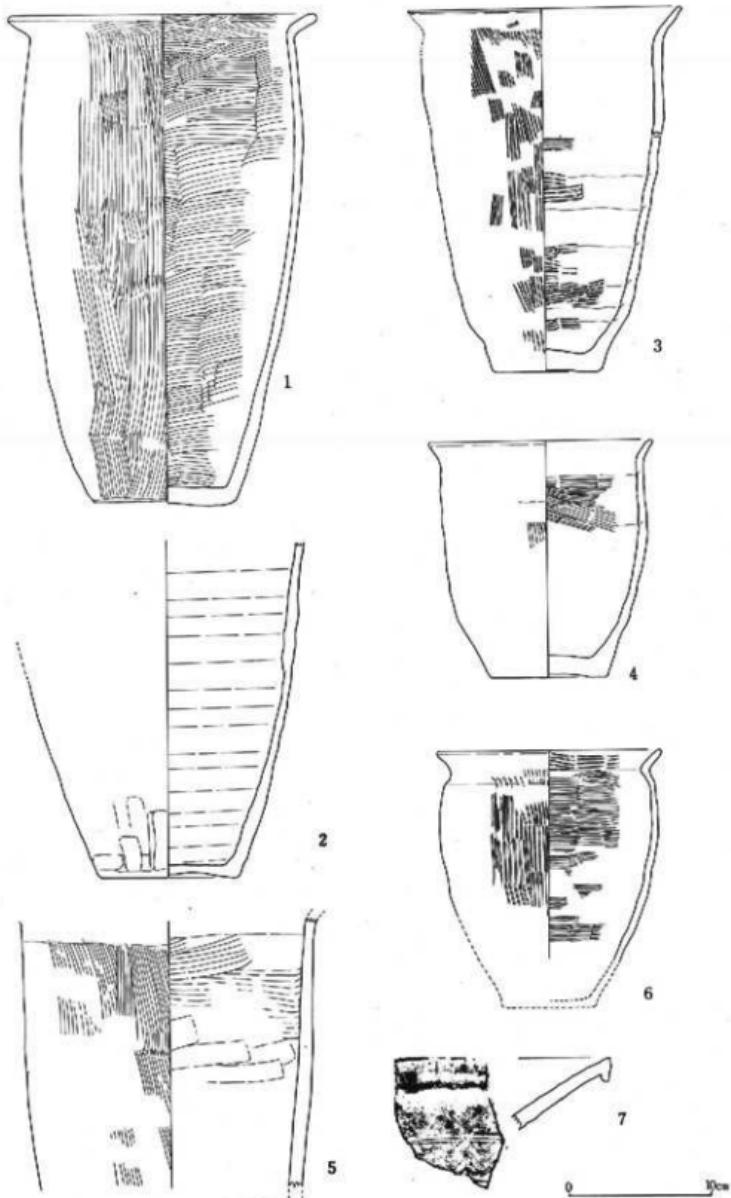
90 トレンチ 64は三角押文とR L 単節縄文が施される。65は三角区画文に三角押引き文が施文される。66は胴部上半の破片、沈線が垂下する。67は棒状工具で平行沈線が施される口縁部破片。68はR L 単節縄文が施される。69は深鉢口縁破片、焼成後に土が付着し、2次焼成を受ける。70は深鉢底部片。71は棒状工具による沈線文と、半截竹管による押引き沈線文が施される。72は押引き沈線文が施され2次焼成を受ける。73は棒状工具による押引き沈線文が施文される。74は情円区画文と三角区画文が同時に施文される。76は押引き沈線文による横帶区画文が施される。77は深鉢口縁部破片で押引きの沈線文が施文される。78は横帶区画文が施された深鉢口縁部破片。79は隆帯に爪形文を有する横帶区画文が施文される。80は半截竹管による押引き沈線文を有する。81は棒状工具による押引き文が施文される。82は棒状工具による押引き文が施文される深鉢型土器片。83はヘラガキの沈線文が施される。84はヘラガキ沈線文を有する底部片。85は棒状工具による押引き沈線文を有する。86は所謂わらび手文が垂下する深鉢胴部片。87はヘラガキ沈線文が綾杉状に施される、手捏ねの台付小型浅鉢。64、65は新道期。66～85は藤内期、86は曾利期。87は加曾利B式期に比定される。

93 トレンチ 88は棒状工具による押引き沈線文が施文され、隆帯を貼付する。時期は藤内期。

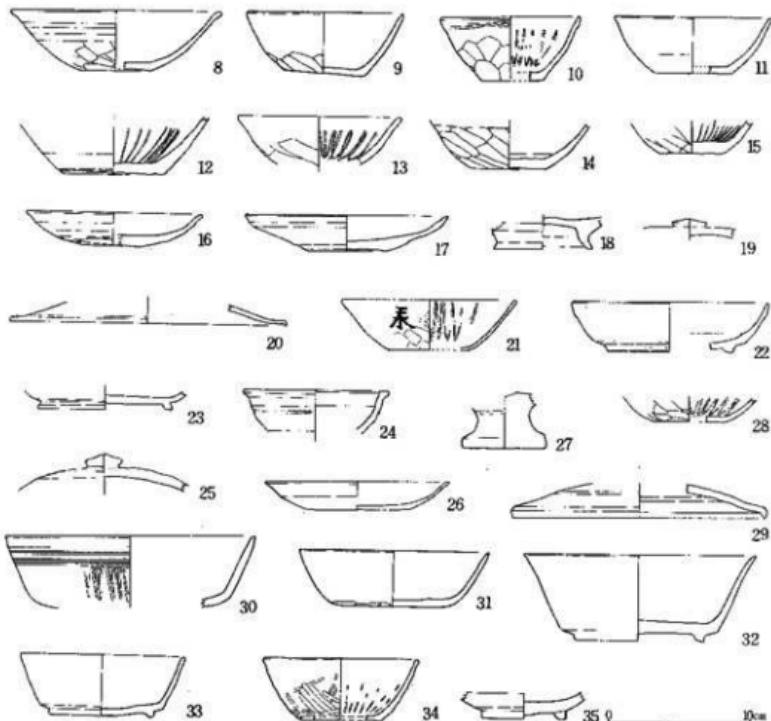
102 トレンチ 90は深鉢口縁部破片。口唇部及び破片中部にR L 単節縄文が施文される。沈線は棒状工具によるもの。

藤内期、新道期、曾利期、後期の順で土器の出土割合が認められる。出土量が多いのは77～84Tで、82、83Tが示す様に一つの集落的なまとまりを感じる。特に82Tは住居址の存在を、否定できない。また90Tも出土土器量が多く、82T周囲と近似した様相を示す。

（小林）



第9図 出土土器、奈良・平安時代I [1/4]



第10図 出土土器、奈良・平安時代II (1/4)

奈良・平安期の土器 (第9・第10図) 出土土器観察表 I

96T 1	土師器 甕	法量 口径22cm 底径10cm 器高35cm 脊部最大径20cm。現存率3/4。胎土白砂粒含密。焼成 良。色調 暗茶褐色。外面中位に黒斑。調整 内面一体部：粗いヨコハケ。底部：粗いハケ。外面一口唇部：ナデ。口縁部：ヨコハケ。脇部：粗いタテハケ。底部：木葉痕のちハケ。
96T 2	土師器 甕	法量 底径9.5cm。現在高24cm。現存率 脊部半完。胎土 密。焼成 良。色調 暗褐色。調整 内面一回転ナデ 底部：回転ナデ。外面一脇中部：回転ナデ。下部：ケズリ。底部：糸切底。
101T 3	土師器 甕	法量 口径19.4cm 底径7.8cm 器高(25.8)cm 脊部最大径17cm。現存率 脊部完。上部～口縁1/5。胎土 密。焼成 良。色調 黄褐色。調整 内面一口縁部：ナデ。脇部：中位～下位にヨコハケ。下脇部：(ハケ)。外面一口唇部：ナデ。口縁部：タテハケのちナデ。底部：木葉痕。
101T 4	土師器 甕	法量 口径15.9cm 底径8.3cm 器高16.8cm 脊部最大径14.4cm。現存率3/4。胎土 白砂粒多含密。焼成 良。色調 暗黄褐色～暗褐色。調整 内面一口縁部：ナデ。上半部：ハケ。外面一脇中部：タテハケ。下半部：ヨコハケ。底部：木葉痕。

出土土器観察表II

101T5	土師器 甕	法量 腹部径21cm 現在高19cm 胸部径20cm。現存率 脇上半1/2。胎土 白砂粒含やや密。焼成 やや良。色調 茶褐色。調整 内面一肩部：横ナデ。上半部：粗いヨコハケ。胸中部：ナデ 外面一肩部：ハケのちナデ。胸部：粗いタテハケ。
103T6	土師器 甕	法量 11径15.9cm 現在高14.8cm 胸部最大径15.2cm。現存率 脇上半ほぼ完。胎土 白砂粒含密。焼成 良。色調 外：黒褐色 内：明褐色。調整 内面一口縁部：ハケのちナデ。調部：ヨコハケ。外面一口縁部：ハケのち回転ナデ。口唇部：ナデ。胸部：タテハケ。
68T7	須恵器 長首壺	現存率 口縁部破片。胎土 密。焼成 良。色調 灰白色。調整 内面一全面的に灰釉をうける。外面 一口唇部：回転ナデ。頸部：回転ナデのち擦拂波状文二段、褐色系の釉がかかる。
52T8	土師器 壺	法量 口径15cm 底径5cm 器高4.3cm 現存率1/2弱。胎土 微細粒含密。焼成 良。色調 黄褐色。調整 内面一体部：回転ナデ。身こみ部：ナデ。外面一体部上半：回転ナデ。体部下半：ヘラケズリのちナデ。底部：ケズリのちナデ。
52T9	土師器 壺	法量 口径11.2cm 底径5.5cm 器高4.5cm 現存率3/4。胎土 窓。焼成 良。色調 赤褐色。調整 内面一体部：回転ナデ。身こみ部：ナデ。外面一口唇部：ナデ。体部上半：回転ナデ。体部下半：ヘラケズリのちナデ。底部：(ヘラケズリ)のちナデ。
52T10	土師器 壺	法量 口径10cm 底径4.5cm 器高4.5cm 現存率1/3。胎土 密。焼成 良。色調 黄褐色。調整 内面一口縁部：回転ナデ。体部：暗文のち回転ナデ。身こみ部：ナデ。外面 一口唇部：ナデ。口縁部：ミガキのちナデ。体部上半：ナデ。体部下半：ヘラケズリのちミガキのちナデ。底部：ミガキ。
52T11	土師器 壺	法量 11径10.2cm 底径5.4cm 器高4cm 現存率1/5。胎土 密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一体部：回転ナデ。身こみ部：回転ナデ。外面一部上半：回転ナデ。体部下半：回転ヘラケズリのちナデ。底部：ヘラ切りのちケズリのちナデ。
52T12	土師器 壺	法量 底径7.4cm 現在高4cm。現存率 ほぼ完。胎土 密。焼成 良。色調 内面 淡赤褐色。外面一赤褐色。調整 内面一体部：回転ナデのち暗文。身こみ部：ナデ。外面一体部上半：回転ナデ。体部下半：回転ヘラケズリのちナデ。底部：糸切りのち回転ヘラケズリのち高台ケズリ出し。高台部：ナデ。
52T13	土師器 壺	法量 口径11.6cm 現在高3.5cm。現存率 体部1/3。胎土 赤色上粒含密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一体部上半：回転ナデ。体部下半：ナデのち暗文。外面一体部下半：回転ナデ。体部下半：ヘラケズリのちナデ。
52T14	土師器 壺	法量 底径5cm 現在高3.2cm。現存率 ほぼ完。胎土 密。焼成 良。色調 淡褐色。調整 内面一体部：回転ナデ。底部：ナデ。外面一体部上半：回転ナデ。体部下半：ヘラケズリのちナデ。底部：ヘラ切りのちケズリのちナデ。
52T15	土師器 壺	法量 底径4.4cm 現在高2.1cm 現存率 底部ほぼ完。胎土 赤色土粒多含密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一体部上半：回転ナデ。身こみ部：ナデのち暗文。底部：ナデ 外面一体部下半：ヘラケズリのちミガキ。底部：ヘラケズリのちミガキ。
52T16	土師器 皿	法量 底径4cm 器高2.4cm。現存率1/5。胎土 赤色上粒多含密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一体部上半：回転ナデ。身こみ部：ナデ。外面一体部上半：回転ナデ。体部下半：ヘラケズリのちナデ。底部：ヘラ切りのちケズリ。
52T17	土師器 皿	法量 口径14.4cm 底径5.3cm 器高2.5cm。現存率 ほぼ2/3。胎土 赤色上粒多含密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一体部：回転ナデ。身こみ部：ミガキのちナデ。外面一体部：回転ナデ。体部下端：ケズリのちミガキのちナデ。底部：ヘラ切りのちケズリ。

出土土器観察表III

52T18	土師器 壺	現存率 脚台部1/2。胎土 白砂粒含や密。焼成 良。色調 内面-赤褐色。外面-茶褐色。調整 内面一身こみ部:回転ナデ。脚部:ヘラナデのち回転ナデ。外面-底部:回転ナデ。脚部:回転ナデ。
52T19	須恵器 蓋	現存率 摘み部破片。胎土 密。焼成 良。色調 暗青灰色。調整 内面-天井部:回転ナデ。外面-縁部:回転ナデ。天井部:回転ケズリ。
52T20	土師器 蓋	現存率 口縁部1/3。胎土 密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面-口縁部:ナデ。体部下半:ミガキのち回転ナデ。外面-回転ナデ。
68T21	土師器 壺 (墨書)	法量 口径12.4cm 底径(6.1)cm 器高3.7cm 現存率1/7。胎土 白砂粒を含み密。焼成 良。色調 赤褐色。調整 内面一体部:回転ナデのち暗文。外面-口唇部:ナデ。体部上半:ミガキのち回転ナデ。体部下半:ケズリ(のちミガキ)底部:ケズリのちミガキ。墨書あり。
68T22	土師器 壺	法量 口径14cm 底径8.9cm 器高3.5cm 現存率1/5。胎土 黒色微粒子含密。焼成 良。色調 内:赤褐色 外:黒色。調整 内面一体部:ミガキ。外面-ミガキのち回転ナデ。底部:ヘラ切りのちミガキ。高台付けのち回転ナデ。
68T23	須恵器 壺	法量 底径9.4cm 現在高1.3cm 現存率 底部完。胎土 微白砂粒含密。焼成 良。色調 黒灰色。調整 外面一体部:回転ナデ。身こみ部:回転ナデ 体部下端にケズリ。底部:ヘラ切り。高台部:回転ナデ。
79T24	灰釉 小鉢	法量 口径10.4cm 現在高3cm 現存率1/5。胎土 密。焼成 良。色調 灰白色。調整 内面一口唇部:指掌ナデ。上半部:回転ナデ。外面-上半部:回転ナデ。ロクロ回転半時計方向。外外面共緑色系自然釉。(15~16世紀のもの)
83T25	須恵器 蓋	法量 天井径4.5cm 現存率 天井部1/5。胎土 白砂粒含密。焼成 良。色調 暗灰色。調整 内面一回転ナデ。外面-縁部:回転ナデ。天井部:回転ヘラケズリ。体部:回転ヘラケズリのち回転ナデ。
86T26	土師器 皿	法量 口径13.1cm 底径7.2cm 器高2.1cm 現存率1/3。胎土 白砂粒含密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一体部上半:ミガキのち回転ナデ。下半:回転ナデ。身こみ部:ナデ。外面一口唇部:ナデ。体部:回転ナデ。底部:ヘラ切り(のちナデ)。
86T27	土師器 台付壺	法量 底径6cm 脚部高3.1cm 現在高4cm 現存率 脚部完。胎土 金雲母含密。焼成 良。色調 暗茶褐色。調整 外面一回転ナデ。底部-回転系切り。
93T28	土師器 壺	法量 底径5.1cm 現在高2cm 現存率 底部1/3。胎土 密。焼成 良。色調 淡赤褐色。調整 内面一回転ナデのち暗文。身こみ部:ナデ。外面-ヘラケズリ。底部:ケズリのちミガキ(のちナデ)。
93T29	須恵器 蓋	法量 口径18.2cm 現在高3cm 現存率 体部1/5。胎土 白砂粒含密。焼成 良。色調 黒灰色。調整 内面一体部:(受け部貼り付け)回転ナデ。外面-体部下半:回転ナデ 体部上半:回転ヘラケズリ。
94T30	土師器 壺	法量 口径17.6cm 底径13.4cm 現在高5.1cm 現存率1/4。胎土 粘密。焼成 良。色調 暗赤褐色。外面一部タール附着。調整 内面一体部:ミガキのち回転ナデ。身こみ部:ミガキのちナデ。外面一部:ミガキ。下端:ミガキのち暗文。底部:ミガキのちナデ。
101T31	土師器 壺	法量 口径13.4cm 底径8.3cm 器高4cm 現存率1/4。胎土 密。焼成 良。色調 赤褐色。内面一体部上半:ナデ。下端-身こみ部ミガキ。外面一体部上半:ナデ。下端:ヘラケズリ(のちナデ)。底部:ヘラ切りのちミガキ。

出土土器観察表IV

101T32	須恵器 壺	法量 口径16.4cm 底径11.2cm 器高6.2cm 高台径9.2cm。現存率 2/3。胎土：白砂粒含密。焼成 良。色調 黒灰色。調整 内面一体部：回転ナデ。身こみ部：回転ナデ。外面一口唇部：ナデ。体部：回転ナデ。高台：ケズリ出しのち回転ナデ。
101T33	須恵器 壺	法量 口径11.7cm 底径8.8cm 器高4.3cm 高台径7.6cm 現存率1/2。胎土 白砂粒含密。焼成 良。色調 暗青灰色。調整 内面一体部：回転ナデ。身こみ部：回転ナデ。外面一体部：回転ナデ。底部周辺：ケズリ ヘラ切りのち高台を付す。高台部：ナデ。
103T34	土師器 壺	法量 口径11cm 底径5.6cm 器高4.4cm。現存率 1/5。胎土 赤色上粒含密。焼成 良。色調 赤褐色。調整 内面一体部：回転ナデのち暗文。内面一体部上半：回転ナデ。下半部：ミガキのちナデ。体部下端：ケズリのちミガキのちナデの底部：ミガキ
表採35	壺	法量 底径6cm 現在高2cm。現存率 底部1/3。調整 外面一下端：回転ナデ。底部：回転ヘラ切り。高台張り付け。鉄軸系の軸をうける。（15～16世紀）

(小口)

試掘坑別、出土土器破片数（但し、図示した土器は含まない）

トレンチ番号	縄文土器	奈良・平安時代以前の土器	トレンチ番号	縄文土器	奈良・平安時代以前の土器
3		2	79		2
4		5	81	15	2
6		1	82	26	
17	2	20	83	24	81
18		1	84	145	22
26	2		85	8	12
28	1	10	86	19	7
30	1		87		18
39		1	88		66
40	2	1	89		8
47		1	90	170	17
52		694	91	10	15
55		11	92	2	8
56		1	93	2	132
59		7	94		8
60	1	7	96	2	52
61	6	23	98	1	8
65		26	101		594
66	1	2	102	177	14
67		30	103		197
68		151	105	2	13
69	2	36	106		2
70	1	22	107		5
71		14	108		7
72	2	2	109		6
73	1	5	111	11	1
74		2	表採不明	24	74
75	6	5			
77	74	41			
78	32	10			

第VI章 ま と め

今回の調査は、遺跡の存在の有無を確認し、合わせてその範囲・内容等の把握を目的とした。調査は充分とはいえたが、多くの遺構・遺物を検出し、その範囲、概略を判定する事ができた。遺構・遺物の分布する範囲は、造成予定地の北半部を中心として約13,000m²に亘る。中でも遺構・遺物の集中する地区は3ヶ所確認され、それぞれI～III区と付称した。(図3)

I区) I区は造成予定地の西辺中央部で77～84試掘坑及び90試掘坑を中心とする。特に、77、82、84、90試掘坑から大量の縄文土器が出土し、78、82、84試掘坑では落ち込みが確認された。時期的には縄文中期(藤内期)が主体となり、同後期まで続く。遺構・遺物の様相からは集落遺跡が期待される。南隣する81、80試掘坑には礫層・砂層が厚く堆積しており、遺構の分布は造成地を越え北西方へ延びるものと考えられる。I区西端では上塙1基と溝1本が検出されたが詳細は不明である。I区は約1,000m²の範囲である。

II区) 造成予定地の北端にあたりE列を中心とする。住居址様落ち込みが7ヶ所存在する。検出面は比較的浅く上面には薄い含疊層が覆っている。覆土には人頭大の礫が混入するもの(5～7、9号落ち込み)が認められる。5～7号落ち込みからは焼土が検出され、6、8号落ち込みからは完形土器が出土している。落ち込み以外では93、96、101、103試掘坑から、奈良・平安時代を中心とする土器が集中して出土している。II区は約2,700m²であり、更に造成予定地を越え北へ延びる事が予想される。

III区) III区はK列東半部を中心とする。68、96試掘坑から住居址様落ち込みが検出された。この周囲には数ヶ所の土塙・溝が検出され、66試掘坑では焼土土塙を検出した。これらの遺構の検出された23～27～J～I区は、発掘前に於いても周囲より一段高く石垣状の烟廻によって囲まれており、表面採集時にも遺物が散布し注意されていた地区である。69試掘坑からは溝状遺構が検出された。黒褐色含疊粘質土を覆土とし大量の土器(奈良・平安期)が含まれる。規模・形状は不明であるが、西隣する70、71試掘坑は黒褐色土が厚く堆積している。94、110、52試掘坑でも同質の黒褐色土が確認され、52試掘坑では大量の土器が含まれていた。壁は前述した69試掘坑では垂直に近い立ち上がりを示しており人為的なものであろう。規模・形状は明らかにしえないが、III区全体をL字形に巡るかなり大規模の溝とも想定される。III区は2,300～2,500m²の規模だが溝を含めると4,000m²に達する。時期的には奈良・平安時代と考えられる。

II、III区中間のG～I列では僅かな遺物が出土しているのみであるが、両者は潜在的な関連性を考慮に置くべきであろう。

以上、造成予定地内には約13,000m²に亘る遺跡の存在が明らかとなり、小字名より「ノ木遺跡」と命名した。従来遺跡の存在が疑問視されていた地区でもあり、特に縄文時代の遺構は予想外のものであった。また、遺跡の拡がりは造成地の範囲を越えている事が窺われる。工業団地造成に際しては、慎重な配慮と適切な文化財保護計画が必要とされよう。(小林・清水)

櫛形町文化財調査報告書 No.4

木 遺 跡

昭和61年3月31日発行

編集者 櫛形町教育委員会
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原

印刷野中印刷
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原

